猫耳姫巫女と聖なる槍の担ぎ手と

三歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猫耳姫巫女と聖なる槍の担ぎ手と

【Ｎコード】
Ｎ６２６０Ｙ

【作者名】
三歩

【あらすじ】
写しの世界…今いる世界と対となるもう一つの世界は魔法文明が発達した世界だった。主人公の月影光太（つきかげこうた）は”写しの世界の自分”に向けられた（勢いがつき過ぎた？）聖なる槍に貫かれ写しの世界へと引き込まれてしまい…。そこで彼は猫耳の少女と出会い世界を救う（かもしれない）行動に出る…。
ライトでチートな異世界トリップ物語です…。
タイトルを「猫耳姫巫女メイドと聖なる槍の担ぎ手と」から変更しました。「メイド」が内容を進めていくうえで助長と感じカットし

ました。

プロローグ（前書き）

開いて頂き感謝・感謝です！

プロローグ

「眠い…」
目を手の甲でこすりながら朝の街並みを歩いていく。
勤めている会社に出勤するため最寄駅に向かっている。
因みに就職して2年目だが今年、うちの会社は新規採用を取らなかったのでまた下っ端だ…朝も少し早早目に行って色々と用意しないとチクチク上司に嫌味を言われる。
バーガーを右手に、ドリンクを左手に持って食べながらテクテク歩いていく。
眠いのは夕べやり過ぎてしまったから…新作ゲームを。
タイトルは「転生勇者ｖｓ異世界トリップ勇者」だ。
説明書には「初心者は転生勇者の方が扱いやすい」と書いてあったので迷うことなく異世界トリップ勇者の方を選んだ…。
はい、ヒネくれてます（笑）。
そんなこんなで歩いていると、

ピシッと変な音がした…。

周りの景色がストップした…。

目の前の空間にヒビ（？）が入って割れた…。

はい？

中から、美女が飛び出してきて
抱きついてきました…。

ラッキー？「グサ！」

え？

この女性…背中に何かはえている…。

異空間（？）の方から伸びている物…槍の柄？

三又の槍が女性の背中に刺さっている…。
あれ？…俺にも…刺さっている？

急に引っ張られた…。

槍の柄が元の空間に引っ込んで行く…。

どうもこの槍の穂先…”返し”がついているみたい。

だから…、つまり…、暗いその空間に自分も引き込まれる…ってわけだ。

やっぱし…夕べは…転生勇者を選べばよかったかな?意識が遠のいていくのを感じながら俺、月影光太は…そんなことを考えていた。

プロローグ（後書き）

更新間隔は不定期です。長めでノンビリ書いて行きます…。

眠い空間のなかでの対面（1）（前書き）

感謝・感謝です！

眠い空間のなかでの対面（1）

眠い…ひたすら眠い…。
気持ちがいいというか…ひたすら眠い…。

（…おい、……か？）

ぼうっとしている意識に何者かが語りかけてくる…うるさい。

（新聞も宗教も間に合ってるよ。）
（？…新聞はともかく、…そっちの世界は宗教を押し売りするのかい？）
（ああ、こないだ駅のホームでイキナリ祈らせてくれって。迷惑だよ…。）
（祝福（ゴッドブレス）を無料で？かなりいい話じゃない？）
（言い訳ないじゃん。別に宗教に文句つけてるんじゃないよ、イキナリ声かけられたらびっくりしするんだよって話し…、てっ！誰？）

眠い目をやっとのことで開くとすぐ目の前に美女がいた。
今の状態は抱き合っているといって良い。
北欧系の人種かな？白に近い金髪に灰色の瞳、見つめていると吸い込まれそうな気になる。抱き合っているので、つまり密接しているのでよくわかる、スタイルは抜群だ。

（アイ　キャンノット　スピーク　イングリッシュ！）
（イングなんとかがしゃべれない？…なんだ？）

目の前の美女がしゃべった。
日本語で？なんか口の動きと言葉が違う様な気がする。

（日本語しゃべれるのか？）
（？…そっちの言葉かい？全然ムリムーリ！）
お手上げのポーズをしてきた。
なんかこのポーズは美女には似合わないな。
（これは推測だけどね、声が頭に直接聴こえる気がするんだ。この空間の特徴か、あるいはコレに一緒に貫かれている影響か…。なんにしろコミュニケーション取れるのは便利だよな。）

そうだよな、異世界に行ってまず、始めにぶつかる困難は会話や言語…つまり意思の疎通が難しいってことだ。
夕べもゲームでそれをなんとかするイベント「言語理解の魔法を手に入れる」をやったっけ。メッチャご都合主義なイベントだよな。

あれ？異世界？

眠い空間のなかでの対面（2）（前書き）

感謝・感謝です！

眠い空間のなかでの対面（2）

ゲームや小説でよくある話だけど、現実に起こるとちょっと焦るな。

（えーと、ココドコ？ワタシダレ？）

（それだと記憶喪失から目を覚ましたばっかりの人っぽいんだけど（笑））

（お約束に突っ込んでくれてありがとう。で、ドコ？ダレ？）

（今度は思いっきり短くしたなあ（笑）。さすがオレの「写し」なだけある）

（「写し」？）

（簡単に言うと、オレの世界と対となるもう一つの世界、「写しの世界」があるらしいんだ…そこにはもうひとりの俺が、「写しの俺」がいるみたいなんだよ。つまりそれが君だと思うよ！）

（わからないことが多いけど…なんで俺が？ていうか男言葉似合わないねキミ。）

（ソロソロ消えるよ…この姿。）

見ていると、顔が変わっていく。

触れ合っている柔らかい女性の体が、固い筋肉質の体に変わって行くのが感じられる。

やがて男性…服装はそのままだけど…になった。

（俺そっくり！）

（変身の術さ…。な！そっくりだろ…だからそうだと思うよ。）

（うん、キミの言う「写し」って説明は理解出来た…体感的にはなんかすっごく損した気分だけど…今までの姿は？）

（惚れた女の姿だよ…影武者ってのをやっててね…彼女の身代わりに聖なる槍の攻撃を受けたってわけさ。）

（そうか…男だね！エライぞ俺！）
（オレだオレ！お前じゃないだろ…。まあ…、オレじゃこのくらいがせいぜいなんだよ…。）
（その言い方、なんか身に覚えがある…まさか彼女には彼氏がいるのか…俺意外に。）
（だからお前じゃないだろ…。まあ、向こうはオレのこと最高の友達って言ってくれてたしなあ。）
（必殺・生殺し！だね。）
（くっ、さすがにオレの写し！グサっときた…でも俺の写しなら同じ様な経験あるんだろ？）
（グサっときた！返された！さすが俺の写しだぜ！）

なんか恋の話で盛り上がってしまった。異世界の話はどこいったんだろ？

眠い空間のなかでの対面（3）（前書き）

感謝・感謝です！

眠い空間のなかでの対面（3）

（まあ、話を戻そう。ダレ？はもういいや。ドコ？の話をしてくれる。）

自分と抱き合ってるって…正直変。
周りを見渡すと、今いるのは直径１０ｍくらいの光る球体の中みたいだ。
外がうっすら透けて見えるけど様子はよくわからない。

（まあ、槍から散々逃げ回ったからどこにいるのかよくわからん。…因みにこの球体は「聖なる槍の結界」だと思う。この中で封印されて一生を過ごすのさ。）
（…今さらりとすごいことイワナカッタ？封印？出られない？ハッ！俺がこうなった理由がまだわかんないままだった！）
（この状況で案外平気だなあ、たぶん…槍の力が強過ぎたんじゃないかな？…大魔王クラスを封印する力を俺みたいなペーペーに使ったから…だから写しの世界にまで影響を…。まあ、この辺は俺も全然わかんないから推測だけどな。）
（そうか…つまり…全てはこの槍を使ったやつのせいか！）
（そこで、オレを恨まないところがオレの写しだよな。「ザ・責任は他人にあり」思考！）
（くうっ、責任者出てこいー！ってくるわけないか。）

（（グスン…ゴメンなさい（泣））））

あれ？なにか女の子の声が聞こえたような。

魔法を使ってみよう！（1）（前書き）

感謝・感謝です！

毎回そうですが、かなり悪ノリ・ライトで行きます。

魔法を使ってみよう！（1）

（何か聞こえなかった？）
（？…いや、なにも聞こえなかったぜ。）

空耳かな？

（まあいいや。それより、このカッコどうにかならないかな？…そういえば、刺されてるのに痛くないや？そっちは？）
（こっちも痛くはない…。俺も又聞きだからよく知らないけど、伝説の神器”聖なる槍”には「魔破」の力と「封印」の力があると聞いている。その槍が俺に向かってシュビビーンと飛んで向かってきてから必死で逃げたんだけどずーっと追いかけてきてな。ついに刺された！と思ったらお前に会って、その後、この球体が現れてさ。痛みはないけど、なんか力が抜けてやたら眠たいんだなこれが…。）

聖なる槍の封印の効果なのか？
自分のほうも眠気は覚めない。

（もしかして寝たら封印中ずっと起きなくて眠り姫状態か…。苦しくないのはいいけどやだなあ。）
（じゃあ、眠くならないように、暇つぶしにそっちの世界のこと教えろよ。）
（その前に質問！さっきの「変身の術」って魔法？）
（当たり前だろ？…まさかそっちの世界にはないのか？）
（ピンポーンその通り！なあ俺、魔法を使えないかな？ワクワク！）
（うーん…、カード魔法ならすぐ使えるかもな…？やってみる？）
（マジ！やるやる！なんでもやる！）

なんか今残念な状態だけど楽しめることは楽しもう！
魔法カモン！

魔法を使ってみよう！（2）（前書き）

感謝・感謝です！

魔法を使ってみよう！（2）

ジャジャーン！
ということで魔法を使ってみることになった！
できるかな？

（封印の効果で使えないかもしれないけどな。）

そう伝えてきてからカードを3枚出してきた。

（好きなの選びな。）

そう言って渡されたカードには
「霧？」、「手」、「オーロラ？」の絵が描いてあった。

（精霊属性の「霧化」と、ノーマル属性の「触診」と、光（聖）属性の「聖幕」のカードだ。光（聖）属性のカードはお前がオレと同じ闇（魔）属性だと心ポケット入れられないし、使えないけどな。）
（心ポケット？）
（まあやって見たほうが早い。どれか選んで心のなかに、胸の奥底に入れって願ってみな。）

まあやってみよう。
心に入っておくれよカードさん…お気楽過ぎかな？
おっと、うっかりどれか選ばないで願ってしまった。
が、手から全部のカードがふっと消えた！

（なんだって！全部入ったあ！？）

まだ魔法使ってないけど…案外すごいらしいな、オレ！

魔法を使ってみよう！（３）（前書き）

ストックがたまりましたので、今日と明日は０時と１２時の２本をアップします。

魔法を使ってみよう！（3）

魔法カードが全部俺のなかに入ったのをみて異世界のオレがびっくりしている。面白いな、自分がびっくりしてるの見るって。

（ビックリドッキリだね！…でもいくつかわかったよ。まず、心ポケットが3つ以上…普通1つだからこれはすごい！）

もしかしてチート？

（ふたつ目は、光（聖）属性のカードが入ったから、属性が闇（魔）ではないこと。ちなみにこれは入るか？）

もう一枚渡された、これには「黒い球」が描いてある。闇（魔）属性のカードのようだ。

もう一度同じように念じるがカードはそのままだった。

念のため1枚出して念じたが、ダメだったので返した。

（光（聖）属性決定だな。ちなみに属性は、無しがノーマル系、地火風水などの精霊系、そして光（聖）系と闇（魔）系ってのがある。）

光と闇は反発しているので逆の属性カードは心ポケットに入れられないとのこと…この辺り細かいルールがあるらしい。

（あと、”魔法が使える魔力がある”ってことだ。そもそもそれが足りないと心ポケットに入らない。3枚分だから…少なくとも初級の魔法使いよりは多いな。）

まあ、その辺はいいや。ともかく使ってみたい！

（どれ使おうかな？「霧化」使ったら霧になれる？槍から抜けられるかな？）

（まあやってみ。使うことを強く念じればいいけど、始めのうちは声に出したほうがいい。）

日本語でいいかな？

「霧になれ！」

一瞬自分の姿が細かい粒子になる感触があったけど…それが消された感触も感じた。

（やはり、聖なる槍に邪魔されてるっぽいな。）

（じゃあ、「聖幕」は？なんか同じ「聖」だしかかるんじゃない？）

（かもしれんがやめてくれ！闇（魔）属性の俺には辛い！結構強力なレアカードなんだぜ？）

（自分が使えないのになんで持ってるんだい？ていうか、そんなん渡すなよ。）

（何かの交渉に使えるかなって…前に神殿に潜り込んだ時に拝借しといたんだよ。それに俺の写しだから闇（魔）属性だと思ったから、その確認用。）

（ふーん、じゃあ「触診」は？）

（手で触ったものの情報を引き出せるカードだ。…聖なる槍を触らなければいけるんじゃないか？）

そうか、なら改めて！

「触診！」

触る対象は自分の身体…ってうわ！

（どうだ？頭のなかに情報が浮かんできただろ。自分が一番わかり

やすい形で情報化されるはずだ。）
（ゲームのステータス画面だ！…わかりやすい！）
自分のステータスを見る。…あれ？
心ポケットの数のところ、解析不能ってでてる。
（なあ、どうだ？）
（…うーん、色々と数値が出てるけど、多いのか少ないのかがわからないなあ。）
（ならオレ触ってみろ。比べてみな。）
そうしよう。手を楽な位置、抱き合っている相手の背中に添えるがコツンと何かに当たった…ああ槍が刺さってたっけ。

あなたは世界を救いますか？はい・いいえ（1）（前書き）

感謝・感謝です！

あなたは世界を救いますか？はい・いいえ（1）

「触診」のカード魔法で自分のステータスを確認して、こっちの世界のオレと比べようと手をオレの背中に回したら、誤まって刺さっている槍に触ってしまった。

・
・
６０
５９
５８
５７
・
・

「触診」の効果は、聖なる槍に弾かれてかき消されると思っていたが…。
そんなことはなく、聖なる槍の情報が浮かんできた。
長さは６ｍ、重さは１ｋｇ…軽いな。穂先の形状は三又と…。
減っていく数字が見えるんだけど。これって、…カウントダウン？

（槍の情報が見えるよ。）
（本当か？どんな様子だ？）
（なんか、カウントダウンしてるんだけど。）
（カウントダウン？何の？）
（さあ？）
（気合を入れればもっとよくわかるぜ？やってみな。）

じゃあやってみよう。

槍を握りその中を深く染み入るように感じてみる。
すると…３Ｄの画面が出てきた。

（…なんだあ？中に女の子がいる？しかも猫耳！）
（（私が見えるの！））
（うん、…猫耳さん何してんの？）
（（時間がないの！お願い手伝って！））
（イキナリ…なにが起こっているの？）
（（この槍の力が暴走寸前なの！））
（…このカウントダウンもしかして？）
（（そう！世界が滅亡するくらいの力なの。こちらの世界が無くなれば、あなたのいた写しの世界もなくなるわ！））

…すごいことが起こるのがあと１分くらいみたい。
どうする？

あなたは世界を救いますか？はい・いいえ（1）（後書き）

あなたなら、あと1分で世界が滅亡するくらいのならなにをしたいですか？
私なら好きな人と手をつないでいたいですね。

あなたは世界を救いますか？はい・いいえ（2）（前書き）

感謝・感謝です！

あなたは世界を救いますか？はい・いいえ（２）

どうしよう？
考えているうちにも…カウントダウンがどんどん進んでいく。

・
４６
４５
４４
・

取り合えずなにを求められたか確認しよう。

（なにをすればいいんだ！）
（おーい、もしかして槍と…）
（（受け止めて！この力を！あなたにしかできないの！））
（できるのか？絶対？確実に？）
（（絶対とは言い切れないけど…））
（やるよ。その代わり何かよこせよ！）
（（何を？））
（なんでもいいよ。報酬があるほうが燃えるじゃん！）
（（え？え？え？））
（時間ないんだろ。早く始めろよ。どうすればいい？）
（心を開いて…何でも来いって思って！）
（アバウトだな、ＯＫ何でもこい！
もう一人のオレよ、俺は世界を救うぜ！）
（…勝手に話してたな。わけわからん。まあ、面白そうだから好きにしろ！）

そして、急に胸の奥底が熱くなった。

身体が発光している！
グッ…俺カッコいい…かも！

カッコつけたど…グッ…苦しい！

ヤッパリ…やめれば…よかった。

シャレに…なんない…。

グッ…あ……あ……あ……！

大魔王シェリー

大魔王シェリーが語ります。

東の空の山々がくっきりと浮かび上がってきた。月明かりしかない夜は、闇を見通す力を持つものが多い魔族に有利な時間だ。しかしもうすぐ終わる。夜があけると同時に、人間側の攻勢が強くなるはずだ。

魔軍を率いる彼女…大魔王シェリーは宙に浮かびながらそう判断をした。ならば…夜が明けるその前にもう一撃。

彼女は魔力を抽出して手のひらに集める。物理的な衝撃と精神的な衝撃を相手に与える闇玉（ダークボール）を打ち出す。闇玉は前方下方にいる人間の軍勢に近づくに連れて分裂し雨のように降り注ぐ。軽く数えても数千の人間の上に降り注いだはずだ。爆発で視界が塞がれていたが、しばらくすると…無傷の人間たちが見える。

またかとウンザリする…人間の歌声が聞こえる…闇の魔力を打ち消す「聖歌」の魔法。地上の部隊が苦戦している最大の理由がこれだ…。ある一定以上の人数が歌わないと効果がないという。そのため、断続的な攻撃を続け疲弊させたり、分断しようとしたりしたが、今のところうまく防がれている。

空中戦ができる戦力はこっちが圧倒しているがあの魔法があるせいで攻めあぐねている。こう着状態と言って良い。

（シェリー！あっち！）

”影”からの警告を受けてそちらを向くと、こちらの戦力を粉砕しながら一直線に近づいてくる一団が見えた。見慣れぬ白い法衣を身に付けたその者達から感じる”力”は今まで相手にした者達には感じなかったものを感じた。

「ふふ、ファイガード王国はアンノルファイ教の戦闘賢者どもを借

り受けたか。面白い！相手になってやる！」
女神アンノルファイを主神とするファイガード王国はアンノルファイ教と親密な関係を保っている。アンノルファイ教は国政に積極的に干渉しないが協力を惜しまないところがある。為政者には扱いやすい宗教と言えるだろう。最もそういう姿勢で王国に取り入っているから栄えている宗教ともいえるだろう。その辺は彼女にはどうでも良いことだったが。アンノルファイ教の聖職者の中で戦闘賢者は一騎当千の実力を持っていると言われる。
一団から一騎…ペガサスに乗った者が近づいてきた。周りの者がその進行を邪魔させないようにしているあたり、自分に当ててくる最大戦力なのだろう。近づいてきた者をみると白銀の鎧を身につけた女戦士と猫耳の少女だ。女戦士の方には見覚えがある。もう一人は見覚えがなかったが、猫耳なのは女神アンノルファイに愛でられている者の証、侮れば痛い目を見るのはこちらだ。
「久しいな！サーラ王女！この前は楽しませてもらったぞ！必死に逃げて行った姿は滑稽だったぞ！ははは！今日も楽しませてくれ！」
「大魔王シェリー！今日こそは…お前の見納めだ！」
サーラの言い回しに引っかかるものを感じた。何度倒されても向かってきては高飛車な口上を繰り返していた彼女にしては勢いがない…含みを感じる。
「ミル…頼む。」
「はい！お姉様、ご武運を！」
そう言うと両手を組んで祈りを捧げるかのように頭を下げた。
「姫巫女の名において…召喚”聖なる槍”！その大いなる力を貸し与えたまえ…。我を人柱に！」
そう歌うように言葉を紡ぐと少女は光り輝き三つ又の槍になった。信じられないような光（聖）属性の力を感じる！シェリーは生まれて以来、始めて恐怖を覚えた。
サーラが槍をこちらに突き出すと槍から光が溢れ出しこちらに向か

ってくる。
とっさに光（聖）属性に強い対抗力を持つカード魔法”闇幕”を張ったがあっさりと貫かれた。
「ぐう！」
あまりの力に身体が傾く…。思った以上に効いた。
「イキナリ真打ちとはな！」
サーラの持つ槍の先に今度は紅い光が灯った。
（やな予感！）
”影”がそういうや否や”影”が”シェリー”に、”シェリー”が”影”に位置と姿を変える。
その途端、紅い光が”シェリー”の身体に巻きついた。
「これで決して外れない！”聖なる槍”よ！大魔王を封印せよ！」
サーラが槍を投げ出す！
”シェリー”が”影”を切り離して逃げる。
すぐに”シェリー”を追いかけようとしたが想像以上のダメージを受けているようだ…身体がうまく動かない…くぅっ力が抜けていく…。
”影”…マーフィーよ、もしお前が封印されても必ず助け出すぞ！！
シェリーの意識は…闇の中に消えていった。

大魔王シェリー（後書き）

もう一人のオレの名はマーフィーです。
ここまでは俺、オレといいあう場面設定のために今まで名前を伏せてきました。

世界を救った代償（1）（前書き）

すいません。かなり短いです。
なので今日も0時と12時の2回アップします。
以後、元の7時に戻します。

世界を救った代償（1）

何だか…眠い…なあ…あれ？
額にひやりとしたものを感じて俺は眼を開けてみる…。
と、目の前に女の子の顔がアップで見えた。
見覚えがある…耳をみると猫の耳をしていた。やはり槍の中にいた女の子だ。
濡れタオルを額においてくれたらしい。
「？？？？？？？？？」
想定していたので驚かないが言葉の意味がわからない。
女の子が何かを言うと笑顔を作った…耳が垂れる。
猫耳がかわいい。
オレンジ色の髪の毛をした女の子は１０歳位か…２４歳の俺にとっては守備範囲外だな。
だがあの耳はポイント高い！
触ってみたい！
本能的欲求に逆らえなかったので、上体を起こして手を伸ばしたが…手がない？
そんなことはなく、服の中に収まっていただけのようだ。袖をめくって手を出す…あれ？
手が小さい。目の前の女の子の手と比べても大差はなかった。
身体をみると、足も靴が脱げズボンに隠れている…。
間違いない…身体が小さくなっている。

世界を救った代償（2）

どうやら、身体が小さくなってしまったらしい。
年齢で言うと１０歳前後か…若返った？
まあ、転生名物の羞恥プレイ（オムツ替え）を受けるまでにならなかったからよしとしよう。
気持ちを落ち着かせようとして周りを見回す。天気はいい、どこかの池のほとりにいるようだ。匂いが自然の匂いだ。都会育ちの自分には違いがよくわかる。
もう一つ目に入ってきたモノがあったが…そちらは無視した。
「あれからどうなったんだろ？もう一人の俺は大丈夫かな？」
そうつぶやくと自分の影が伸びて膨らんだ。
人の形を取ると…もう一人の”オレ”になった。
もう一人のオレは軽く俺に触ると頭に声が聞こえてきた。
（言葉通じないだろ。「触話」のカード渡すからと使ってみな。）
そう言うと手を離した。その手にカードが現れる。
握手している絵が描かれている。
そのカードを手に取り心ポケットにいれてみる。
それから、もう一人のオレの手に触れた。
（あー、あー、テス、テス、テス、ただいまマイクのテスト中…聞こえる？）
（…こっちの住人にわからないギャグはやめろよ…最後気弱になったろ。）
（心からすまみませんえん。…ごめん。ほんっとうにゴメンなさい。）
（…一瞬、本当に俺の写しかと悲しくなったぜ。）
（真面目をやろう。俺は月影光太、”こうた”でいいよ。）
（オレはマーフィーだ、コータ。）
（じゃあ、まず教えてくれる？マーフィーとこの子に色々聞きたい

んだけどその前にマーフィーに聞きたい。この子は知ってる？）
（ああ、戦争相手だ…。そこら辺は3人で話した方がいい。）
女の子の方をみると、察がいいのか手を出してきている…その手を握った。
（聞こえる？）
（はい…聞こえます。）
（名前教えてくれる？俺は月影光太、”こうた”でいいよ）
（はい、私はミルフィーユです。みんなからはミルって呼ばれてます。コータ…様。）
少し震えている…手も…頭に響いてくる声も。
今、右手でマーフィーと、左手でミルと手を繋いでいるかたちだ。
（今のミルの声、マーフィーにも聞こえる？）
（聞こえるぜ。こういう会話は始めてだな、面白い。）
俺はを仲介しての情報交換会が始まった。

世界を救った代償（3）

今、俺はが「触話」のカードを心ポケットに入れて魔法をかけ、俺の写しのマーフィーと猫耳のミルに触れることで会話が成立している。

（では、…ミルに聞く。さっきの空間で俺とマーフィーが話していたのは聞こえてたんだよな。）

（はい、…聖なる槍は感応鉱物オリハルコンでできているので、心がつながると会話ができるんです。）

（その辺はあとでいいよ。今までの経緯を俺に話してくれないか？俺こっちの世界のこと知らないからわかりやすくね。）

（はい、では、私の素性から。私はファイガードという王国の第２王女です。

今、私たちの国と大魔王シェリー率いる魔軍とは戦争をしている状態なのです。大魔王シェリーはあまりにも強く最後の手段として私達は”聖なる槍”を召喚することに決めました。

この槍の召喚し扱うには王家の血を引く姫巫女と呼ばれる者が人柱になることが必要で…つまり…それが私です。）

少し苦しそうな顔をした。…ムカッ！こんな小さな女の子を人柱にして…聖なる槍だあ？…。いきなり刺されたもんで聖なるモノなんて全然思っちゃいなかったが…。

（人柱になった私が入った”聖なる槍”が見事、大魔王を貫き封印しようとしたときです…槍は、この人が大魔王でないことを見抜きました。）

ミルはマーフィーの方をみた。マーフィーは肩を竦めて呟いた。

（影武者が俺の仕事だったからね。）
（…見事に欺かれたとしかいえません。）
悔しそうな顔をして、また俺の方を向いた。
（ともかく、槍は中にいた私に非常事態を伝えてきました。封印対象の力が弱すぎてバランスが取れず、強すぎる封印の力がこのままでは暴走してしまうと。…緊急事態を回避する方法を槍は示してきました。…次元を超えて、今貫いている者の「写し」を貫き、その者に暴走する力を流し込むことを。それは槍には容易いことだと。私は急いで確認しました、その者の命には問題はないか？と。槍は問題ないと伝えてきました。）
ちと疑問が…その質問では命さえ無事なら…ってことになんないか？
（本当に申し訳なかったのですが、その…あの…サクッと刺しました。）
（プククッ…ストレートだな。）
（笑うとこじゃないぞ！）
（はい、…笑い事ではありませんでした。暴走しようとする力を必死になって制御して、コータ様に注いでいたです。ですが…）
ミイはまたマーフィーをみて
（また、問題が起こりました。コータ様の心ポケットにカードを入れた影響で力がコータ様に入らなくなってしまったのです。）
れれれ？
俺がカード魔法使ったせい？でも不可抗力だし、勝手に俺の中にド

クドク力を注ぎ混んでいたみたいだし…俺が悪く思う必要ないよな？

（しばらくは、力を暴走させないようにするので精一杯でした。そこにコータ様から声がかかったので…。）

（んん？それなら俺に魔法のカードを外すようにいえばよかったんじゃない？）

（ダメです。槍が言うには、力の入り口がポケットに変わってしまったと。カードを外してももう戻らないから無駄だと。…それで、また…槍が…。）

（何て言って来たんだい？）

（本人の許可があれば他に入り口が作れると…強引にですけど。）

（…で、あのお願いだったわけね？）

（本当に申し訳ありません！色々ご迷惑をかけて…）

（それもあと！ちなみに俺がなぜ子供になったのかわかる？）

（それは暴走した力のせいです。あの槍は過去と現在と未来の時間をつなぎ合わせて無限の閉鎖された時間の輪を作り封印となすのです。色々と暴走しまくったせいで、過去が強くなっていた…というのが私の槍の中での最後の記憶です。私もあの後気を失ってしまって…気がつくとコータ様と一緒にここにいました。その後、”聖なる槍”がどうなったかもわかりません。）

うーん、やっぱりそうか…ワカンないんだ…。

（マーフィーもどうなったか知らない？）

（槍か？知らんよ。なんかの力がコータに集まってくる代わりに封印が解けたのがわかったからコータの影になって隠れたんだよ。槍は元のところに戻ったんじゃない？召喚系の武器みたいだし？）

むう、コッチもトボけているわけではないらしい…。

…ここにあるのに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6260y/

猫耳姫巫女と聖なる槍の担ぎ手と

2011年11月28日07時45分発行